

# I P E 書評集

小野塚ゼミ 3 回生 2006 年

社会学的想像力を持っている者は、  
巨大な歴史的構造が、  
多様な諸個人の内面的生活や外面的生涯にとって  
どんな意味を持っているかを理解することができる。

.....

日常生活のこの混乱の内部でのみ、  
近代社会の構造を探求することができ、  
またその構造の内部でさまざまな人間の心理が解明される。

「人間性」の範囲は驚くほど広大なものである

人間というものは  
社会によって、またその歴史の力と衝撃によって形成される

.....

彼・彼女が生きているという事実は、  
この社会の形成と歴史の進行に対して、  
たとえどんなに些細であれ、貢献していることを意味する。

C. ライト・ミルズ 『社会学的想像力』

報告日程の管理・ゼミ代表 福永

書評集の編集 小玉・小野塚

2007年1月

## 目次

大恐慌：1929年の記録	小玉 圭祐
アンドロイドは電気羊の夢を見るか？	宇野智明
新戦争論：グローバル時代の組織的暴力	加川 実咲
社会学的想像力	越智 直紀
EUを創った男：ドロール時代の十年の秘録	増田 茉美子
太平洋戦争の起源	徳島 昇治
国際通貨制度入門：歴史・現状・展望	尾崎 裕輔
バナナと日本人	
：フィリピン農園と食卓のあいだ	福永 英理子
分裂の世界史	
：かくてエゴむき出しの時代が始まった	北澤 麻衣
追われゆく抗夫たち	林 健太
国際紛争：理論と歴史	大塚 俊輔
プレイヤー・ピアノ	青才 章吾
《I P E》と社会認識 = 社会変化	小野塚 佳光
I P Eの重要文献リスト	
現代日本社会の不安	小野塚ゼミ

# 大恐慌：1929年の記録

小玉 圭祐

1929年の秋からアメリカ全土にわたって繰り広げられた恐慌という壮大な社会的悲劇を記録したものがこの本である。現代に起こった大きな事件として二度の世界大戦と大恐慌が挙げられる。普通、大恐慌が語られるとき、多くは経済的過程の変化だけが問題にされて、大恐慌がもたらす社会的衝撃の内容はほとんど不問にされている。これは、現代史を知るうえの盲点の一つとなっている。恐慌が国民生活に浸透していく過程で一人一人の人間がどのように恐慌耐えていたのか、あるいは恐慌に屈したかはなかなか知ることができなかった。この本は『大恐慌の犠牲者の眼』を通じて社会生活の動揺を描写するという形をとっているため苦難に直面した人間と民族への共感を誘ってくれる。

日本人は時代を区切るときに戦前と戦後というように区切ることが多い。しかし大恐慌を経験したアメリカ人はそれとは違い、大恐慌前と大恐慌後に区切ることが普通である。それほどアメリカ人にとって恐慌というのは史上最大の大事業だった。実際この本を読んでいると現在の私たちの生活からは想像できないような苦しい生活を送っていたことがよくわかる。恐慌の時代を経験したアメリカ人は今日の「ゆたかな社会」に暮らしていても、あの惨憺たる「ガラ」への恐怖は続いている。私たちの世代の人々は、大恐慌を経験していないわけで、今日の「ゆたかな社会」があたりまえのものにしか映らない。大恐慌での失業や飢え、放浪などの経験を、身をもって知っている世代と知らない世代があるということは現代のアメリカが抱えている問題の一つである。

しかし、私たち日本人にとってもこれをよその国の話として片付けるわけにはいかない。なぜなら大恐慌は資本主義という経済の仕組みのうえに発生した史上空前の規模の不況だったからだ。

恐慌において深刻な問題になったのが失業である。最初に企業は解雇と賃金カットを始めた。年々カットの幅は大きくなっていった。詳しい数字はここでは書かないが、やはり企業が苦しい場合は雇っている人間の賃金を低下させ、首をきることが一番早いことが読んでいたらわかる。

このように失業した人々は仕事を探しても見つかるはずもなく、靴磨きや陪審員などをして非常に少ない金を手に入れて生活する人が多くいた。ほかには、地下鉄で寝ていたり浮浪していたりすると警察によって逮捕される。しかし、それが本人達にとってみれば幸いであるとも考えられる。なぜなら、いろいろな手続きなどで一晩警察に泊まることもある。それによって宿が確保でき、夕飯にありつける。失業者にとってはそのような生活が普通であった。

農民も恐慌によって大きなダメージを受けた。経済の崩壊によって農産物の価格が低下した。これでは農民は儲からず、自作農であった農民が小作農になったケースがほとんどであった。土地所有者も借金ができて、土地を担保に入れなければならなかった。その他、土地に関する問題は抵当権問題などとても多くあった。地主など小作人を養えないぐらいに金に困っていて、商人に借金しているケースがほとんどであった。このような事態では現在の社会ではありえないが、当時の人々は相当いろんなものを犠牲にしたりして何とか生計を立てていたに違いないと思う。

この他に恐慌時代のアメリカにはまだまだ問題は山積みであった。税制の問題、政府による救済の問題、学校教育の問題、浮浪者の問題、中産階級の救済、高等教育を受けた人々の失業などの問題、デモの問題などとても多くの問題があった。

この本を読んで当時の状況を知って、現在、恐慌を経験していない我々が何を考えなければならぬかというと、やはり、このようなことがあったという事実を知って、これからの未来の社会、経済のために何が出来るかを真剣に考えるべきである。

この本は個人的に読んでいてあまり飽きなかったし興味がわいて結構おもしろかったです。

## コメント

恐慌を経験したことで、アメリカ人の考え方は変わり、制度も変わったと思います。アメリカが、社会として、激変したわけですから。現代の私たちが当然と考えている制度や政策も、その多くはこの経験によって実現した以上、現実の条件が変化することで、見直されるのも当然です。

しかし、それらを簡単に批判する前に、『大恐慌』を読んでみることです。私たちは大恐慌の渦中に投げ込まれ、阿鼻叫喚と血煙、死臭を感じる事ができるでしょう。制度や政策を変えた当時の経験を少しでも理解した上で、改革を議論してほしいです。

西部や南西部の道路には、  
飢えた人々がぞろぞろ歩いていて、  
自分を運んでくれる車をさがしています。  
そして野宿する人びとがたいている火のあかりが、  
どんな鉄道沿いにも必ず目に入ります。  
自動車の走るべき道路を、  
男、女、そして子供たちが歩いていきます。  
小麦や綿花市場の最近の不況のために、  
すっからかんになった借地農の一家がほとんどでした。

10 人の子の父親、  
チャールズ・ウェイン（57 歳）は、  
この 2 年間失業していた。  
けさウェインはスプリング・コモン橋にたたずみ、  
仕事に向かう人びとの群れを眺めていた。  
やがてコートを脱ぎ、  
ていねいにたたんでから、  
渦まくマホニング川に身をおどらせた。  
ウェインはヤングスタウンの生まれで、  
リパブリック製鉄で 27 年間も製鉄工として働いていた。

D . A . シャノン編『大恐慌 1929 年の記録』

# アンドロイドは電気羊の夢を見るか？

宇野智明

「フィリップ・K・ディックの描く未来世界は、我々自身の世界の歪んだ鏡像だ。その歪みがそれをSFにし、そのイメージが急所をえぐりだす」 デモン・ナイト

この一文は、記者のあとがきにある文章です。私はこの文の中にこの小説の全てが要約されていると思いました。

この小説は、私たちの世界の悲劇的な未来図を描いています。生物は死に絶え、人々は放射性物質の汚染に苦しみつづき、唯一、共感（エンパシー）ボックスを使っての宗教的なある人物への信仰とも言えるような共感のみが心の平穏となっています。その上、自分の感情をも情調オルガンと呼ばれる機械で人工的に感情を切り替えて日々の生活を送っているような世界です。

これは、現在の私たちの世界への強烈な批判になっていると思います。その批判の対象を、大きく2つに分けて述べたいと思います。

まず1つ目は、人間以外の生物が死に絶え、その人間さえも環境の汚染によって減少している点と言うまでもありません。それに加え、共感ボックスと情調オルガンの存在です。これらは、テレビやパソコンの進化（あるいは、退化）していったものだと考えられます。

今現在、ちゃんとその情報の真偽を考えながらテレビを見ている人間が何人いるでしょうか？大半の人間が、テレビ番組を作っている人間の流す通りに家族を殺された被害者に同情し涙を流し、犯罪者に怒りを感じ、後にその犯罪者が冤罪だと判明すれば以前自分がその人物に憎しみを抱いていた事などすっかり忘れ、警察の怠慢を怒り、冤罪被害者を哀れんだりします。

これは、自分で感情をコントロールしていると言えるのでしょうか？最近よく言われるようになった「マスコミに踊らされている」という言葉。これは共感ボックスの能力の一部そのままです。テレビの報道で起こった海外の暴動などを見ていると、もうこの箱の力は宗教的なまでになってしまったのではないだろうかと考えます。

次に2つ目は、アンドロイドと機械生物の存在する点です。これは現在の世界にはまだ開発されていない技術ですが、近い将来必ず実現されるものだと思います。

この小説の中では、天然の生物、つまり放射性物質で絶滅しなかった希少な生物を飼うことが最高の贅沢とされています。しかし、それには莫大な金銭が必要となるため主人公をはじめ裕福でない人物は、精巧に作られた機械生物を代わりに飼っています。

この行為を、私は一種の「感情移入」だと思っています。

「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」の重要なテーマは「感情移入」なのですが、ペットを飼うという行為はまさにそれそのものなのではないでしょうか？例えば自分の飼っているイヌが殴られても、実際には飼い主に痛みは感じられません。しかし、イヌが殴られ、痛そうに身をのけぞらせて悲しそうにうめく所を見れば十人が十人、その飼い主は烈火の如く怒るでしょう。それは「痛そうだ」「可哀想だ」「せつないだろう」という共感、同情、つまりイヌに対し「感情移入」しているからこそ起きる感情なのです。

その点、この小説の中のアンドロイドは感情移入が出来ません。抵抗も出来ない小さなクモの脚を、興味本位でぶちりぶちりとちぎって遊んでいたります。そして、この「感情移入出来ない点」のみが人間とアンドロイドを見分けられる点なのです。

そこで問題となるのは一つの矛盾点です。アンドロイドは感情移入が出来ません。残酷なことですら、平気でやってしまいます。それと違い、人間はどんなものに対しても感情移入出来ます。アンドロイドを除いて。

何故人間はアンドロイドに対しては感情移入しないのか？主人公は物語の途中、一人のアンドロイドに対して「共感」してしまいます。何故人間は彼らを殺戮してしまえるのだろうか？自分たちが作った機械生物と同じ、いやそれ以上に言葉を発し、考えて行動出来るものに対してどうしてなんの感情も抱かず殺してしまえるのか？

この物語は痛烈な批判を述べています。それは、人間は感情を持った素晴らしい生物なのに、現在の世の中は自分の感情を他人に預け、自分で考えず、ましてや他人の言葉に踊らされ、冷酷なまでに相手を思いやらず行動する。そんな現実に対して、この物語の主人公は自分の冷酷さに自らがアンドロイドなのではないかと悩み、狩り殺すべきであるアンドロイドに共感してしまった自分を人間として異常かと思ひ込む、そんな弱い人物です。しかし、そんな彼はとても「人間らしい人間」として描かれています。

この小説はフィクションです。とはいえ、これほどリアルな未来図を、悲劇的ではありますが、「あり得る」未来の世界像、人間像を示した作品だと感じました。

## コメント

映画『ブレードランナー』の原作として有名ですが、映画とは異なる魅力があります。小説は、現実の本質を伝える人工的な世界であり、虚構です。ここに描かれた世界はどこにもないのに、どこか親しみのある、狂っているけれど、心に響くものがあります。…それは何か？

放射能灰のみなぎった朝の気は、灰色に太陽を覆い隠し、  
彼のまわりでおくびをもらし、  
彼の鼻腔にまわりついてくる。  
世界最終戦争の遺産は、すでにその強力さを弱めつつある。  
死の灰に生き残れなかった人びとは、とっくの昔、忘却のかなたに去り、  
そして、いまずっと弱まった灰は、しぶとい生存者たちと対決して、  
その精神と遺伝子を錯乱に導いている。

・・・アンドロイドも夢を見るのだろうか？ リックは自問した。  
見るらしい。  
だからこそ、彼らはときどき雇い主を殺して、  
地球へ逃亡してくるのだ。  
苦役のない、より良い生活。  
不毛な岩だらけの荒原、  
もともと居住不可能な殖民惑星で汗水たらして働くより、  
たとえばルーバ・ラフトのように、  
ドン・ジョバンニやフィガロの結婚を歌うほうを選ぶのだ。

フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』

# 新戦争論：グローバル時代の組織的暴力

加川 実咲

メアリー・カルドーの『新戦争論』は、現代の戦争がかつて昔に行われていた戦争とは本質的に変わってきていることをボスニア・ヘルツェゴビナの戦争を例に出し、解明しているとても興味深い、勉強になる本である。その中ではかつての戦争を「古い戦争」、現在行われているような変化した戦争を「新しい戦争」として定義している。

メアリー・カルドーは古い戦争をこのように解釈している。クラウゼヴィッツは戦争を「自らの意思が達成されるように敵を強制することを意図した暴力行為」と定義している。この定義は「我々」と「我々の敵」は国家であり、ある国家の「意思」は明確に特定できるということを示唆している。したがってクラウゼヴィッツの定義では、戦争とは、定義可能な政治的目的、つまり国家の利益をめぐる国家間の戦争なのである。国家の利益が戦争を遂行する正当な理由であり、戦争は国家利益追及のための合理的手段であり「ほかの手段による政治の延長」であるとされた。

しかし20世紀の総力戦としての戦争は、国民全体のエネルギーが大規模に動員され、市民への無差別爆撃が敵の士気を削ぐという根拠で正当化されるに至り、戦争がますます多くの人々を巻き込むようになると、国家利益の観点から戦争を正当化する説明が、かつては人々を納得させるような妥当性のある程度持ちえていたものの、ますます空虚なものとなってしまった。

1980年代から1990年代にかけて、特にアフリカや東欧において拡大した新しいタイプの組織的暴力が「新しい戦争」と呼ばれる。多くの文献では、「新しい戦争」は国内紛争、内戦、または「低強度紛争」などと表現されている。新しい戦争の目的は、異なるアイデンティティの人々や、異なる意見を持つ人々を排除する事により住民をコントロールすることなのである。したがって、これらの戦争の戦略的目的は大量虐殺や強制移住、様々な政治的、心理的、経済的な嫌がらせのテクニックを用いた住民の追放にある。そのため新しい戦争では、軍人同士の争いは少なく暴力行為は一般市民に向けられた。基本的に古い戦争では正当化されず望ましくない副産物だと考えられていたものが新しい戦争では戦闘方法の中心的な要素になったのである。

「新しい戦争」は、古い戦争とは異なる三つの特徴がある。

今までの戦争が地政学上または、イデオロギー上の目的に基づいているのとは対照的に、「新しい戦争」の目標はアイデンティティ・ポリティクスに関わるものである。(ここでのアイデンティティ・ポリティクスとは、民族、氏族、宗教や言語であれ、ある特定のアイデンティティに基づく権力の追求を意味する。)

「古い戦争」では、典型的な部隊は垂直的かつ階層的に組織されたが、これとは異なり、「新しい戦争」で戦闘を行う部隊はきわめて幅広い様々な種類の集団を含んでいる。組織的に見るならば、それらの集団は非常に分権化されており、相互に対立したり、陣営が異なる場合でさえも時には協調したりしながら行動する。

二つの世界大戦における戦争経済は、集権的、全体的かつ自給的なものであるが、新しいグローバル化された戦争経済は分権的である。戦争への参加率は低く、失業率はきわめて高い。さらに、この経済は外部資源に多くを依存している。「新しい戦争」では、世界的規模の競争、物理的な破壊、通常貿易の中断などの理由から、税収と国内の生産が劇的に減少する。こ



のような状況下で、戦闘集団は略奪や闇市場、あるいは外部からの支援によって資金を調達する。

本書から分かるように戦争も時代の流れ、グローバル化によって常に変化しているといえる。ボスニア・ヘルツェゴビナでの戦争および「9, 11」を目撃してしまった我々は、もはやこのような「新しい戦争」観を共通の前提として、戦争と平和を論じなければならないだろう。

## コメント

戦争は社会を反映します。大国間の、領土をめぐる戦争から、テロや信仰集団の自爆、核や細菌兵器の強奪、女性や子供の国際的人身売買、エスニック・クレンジングなどが生み出す紛争・暴力・殺戮をめくって、国際秩序の性格も変わってでしょう。

戦争とは社会的活動である。

むしろ安全な環境を作ることのほうが、  
武装解除よりもずっと重要なのではないか。  
効果的な警察活動と戦争犯罪人の逮捕は治安確保のための基本的条件である。

法の支配と秩序の確立には、  
独立した信頼できる司法と、  
活発な市民社会、  
すなわち比較的自由な公的空間を創り出すことが必要となる。  
このため、  
自集団中心主義的なプロパガンダを止めさせ、  
単に物理的な嫌がらせだけでなく  
心理的ナイヤガラ汗を解消するためにも、  
教育と自由なメディアへの投資が不可欠である。

人びとの生活のなかに立ち込めている恐怖に満ちた雰囲気を取り除き、  
とくに若者たちに対して、  
軍隊やマフィアとは別の生活手段を与えるために、  
復興によって経済的な安全保障と未来への希望が与えられねばならない。

メアリー・カルドー 『新戦争論：グローバル時代の組織的暴力』

# 社会学的想像力

越智 直紀

この本では、人々は自分の意思でしているつもりが、実は社会全体の支配を受けていると述べている。これはどういうことかというところ、たとえば戦争が始まったとしたら、それまで保険のセールスをやっていた人は、ロケットの発射兵になるし、主婦は、夫が戦場に行くため、一人暮らしになる。というようなことだ。確かに、今までそういうことは考えたこともなかったが、知らず知らずのうちに歴史的な公的な変化と、私的な個人の生活は、密接にかかわっているのだなと感じた。

また、著者のミルズは、「社会学的想像力」を持っている人は、このような巨大な歴史的状况が、多様な個々人の内面的生活や、外面的生涯において、どんな意味を持っているのかを知ることができるとしている。

また、その一方で、「社会的想像力」に乏しい研究である、現代の社会学の傾向を批判している。それは主に二つで「誇大理論(グランドセオリー)」と「抽象化された経験主義」で、「誇大理論」とは、極めて一般性と抽象性の高い理論を指し、わかりやすく言ってしまうと、ものすごく難しいし巨大な感じがするので、すごいことを言ってそうだが、現実からかなり離れてお話をしてしまっているの、役に立たない理論と論じ、「誇大理論」の代表者として、システム理論家のパーソンズを名指して常識的なことが無駄なことしか書いてないと批判している。

もう一つの批判対象は「抽象化された経験主義」で、これは、統計やデータ操作の手法ばかりに気がいってしまって、肝心の研究対象の位置づけがなされていないような傾向を指している。彼らは、「個別の研究では、意味がないかもしれないし、何の役にたつかわからないかもしれないが、このような研究が積み重なっていくことで、見えてくるものがある」と主張するが、かならずしも、実体はそのようなものではないとしている。社会学者の実情をあまり詳しく知らない自分であるが、確かに現実とかけ離れてしまっているのであれば、研究自体も、研究のための費用なども無駄であると思うし、後者の場合は、学者の自己満足のような感じもするし、とても鋭い指摘であると思う。

では社会学的想像力とはなんなのかというところ、具体的に「これが社会学的想像力だ」とちゃんと書き示している所がないので、なんとも言えないが、個人的には、極めて個人的、個別的な事象も、より広い社会構造と結びついているという認識のことであり、そのような広い問題を考える際にも、それを私たち個々人の経験的なものと離れきったものにしないようにする必要があり、それらに必要な能力が「社会学的想像力」になる、といったような感じだろうか。「社会学的想像力」を身につけるために、筆者は理性的発展などといったことを提示しているが、よくはわからない。

## コメント

「社会学的想像力」を持つことは、孤立した事象の背後に社会的なつながりを見出し、自分だけの苦しみではなく、社会的な抑圧に抵抗する仲間がいることを教えてくれる力となる、…多分、ミルズはそんな風に説明するでしょう。何かを定義する、というより、考える姿勢、方法のようなものです。私はこの本を読んで、精神の躍動感や果敢な挑戦を感じ、非常に感動したのですが、今の学生たちに

は退屈なお説教なのか…？

社会を認識するというのは協同作業なのだ、と思います。私たちは社会を共に生きているのですから、文学でも、社会学でも、IPEでも、現実を抽出し、象徴する表現に関わる姿勢が、書き手と共に読み手にも問われます。それがなければ、どんな言葉も共鳴しないでしょう。

現代は不安と無関心の時代である。  
そこにしばしば存在するのは私的问题ではなくて、  
漠然たる不安の苦痛である。  
しばしばそこには明確な公的问题ではなく、  
すべてがただなんとなく不当であるという敗北感が存在するにすぎない。

いかなる社会調査も思想によって前進する。  
それはただ事実によって律せられるだけである。

教師の最大の職務は、  
いわば自律的な主体的精神というものが何であるかを、  
できる限り十分に学生に提示することでなければならない。

何よりもまず自由は、  
実現可能な選択の方向を定式化し、  
それについて討議する機会であり、  
したがって選択する機会を意味する。

すべての人間が真実、理性の持ち主となり、  
その独立した理性的思考によって、  
彼の社会、  
歴史  
そして彼自身の生活方向に対して  
構造的に影響を与えるという、  
そのような社会の理念

C・W・ミルズ『社会学的想像力』

# EUを創った男：ドロール時代の十年の秘録

増田 菜美子

ジャック・ドロール 彼がEC委員会の委員長を務めていた1985～1995年までの約10年間に起こった出来事およびECでの変化についての実録である。この期間はECにとって最大の再編期であり、さまざまな動きがあった。一番大きな変化として、EC(欧州共同体)からEU(欧州連合)へ変わり、ヨーロッパが統合された。また、ECの新たな目標として、通貨統合・政治統合に向けて働きかけていった。

ドロールがEC委員長を務めた10年間は、各国の代表者やその地位に値する人との交流や意見の対立、経済や政治などの政策改革など、ECを運営していくにあたって多くの問題を抱えていた。統一政策を築くために力を合わせなければヨーロッパ諸国は衰退すると考えるドロールに対し、国家主権擁護派で欧州統合機関が力を強めることに反対のサッチャーとの対立。コールとドロールが協力して進めた東西ドイツの統一。1988年の『ドロール包括政策』、1987年IGC(政府間会議)による単一欧州議定書案が発行され、1992年市場統合計画、経済通貨同盟案が提案され、ついに1993年にEC創立以来の夢であった市場統合が実現し、域内の物の流通から国境の壁が消えた。このような平坦な道のりではない発案がECを前進させ、ヨーロッパ統合であるEUへと変化させていった。

ヨーロッパ諸国は陸続きということもあり、文化的な面での価値観に共通点が多くみられる。もし、お互いが協力体制を整え、経済・外交・軍事の力を結集させることができれば、超大国であるアメリカに対してもひけを取らない存在となるだろう。ヨーロッパ全土が共同政策をつくり、実施することができれば、世界的にみても巨大勢力となり全世界にとって驚異的な国家なるだろう。しかし、現在の状況を考えると、国家ごとの政治家たちの意見がまとまっていない。そして、統一されているものも少ない。ユーロ通貨もそうであるようにEUに加盟しているすべての国で導入はされていない。統一を目指しているものの、国家の利益を求めため中途半端なままである。しかし、全てが統一されたとき、ヨーロッパは、どの面においてもアメリカに劣らない世界的大きな存在となることであろう。

この本を読むにあたっては、登場人物についての知識が必要とされる。多くの著名人がでてくるこの時代において、ドロールと言う人物がどのようにECを組み立てようとしているのか、そしてどんな社会を目指そうとしていたのかということが分かってくると思う。ECからEUへ変わる時期に興味がある人には読んでほしいと思う。アジアでも東アジア共同体を作るべきかどうかという議論がなされている。しかし、アジアの国々は文化も価値観も違っている。その中でも、戦争の歴史が大きな問題となってくる。そのような中で、EUのような共同体を作ろうとすることは困難極まりないことだと感じる。いろんな知識をもち、多くの問題に目を向けて考えていくことが、これからの社会に必要であると感じた。

## コメント

通貨統合という経済的な偉業、もしくは政治的奇跡が成功したのは、ジャック・ドロールという優れた政治家がいたからだ、ということが、さまざまな問題について合意形成するプロセスで示されています。現実の秩序を決めるのは、しばしば突発的な事件であり、異なった利害や考え、信念を動か

す説得作業です。現実を正しく理解する、というのは重要ですが、それはいつも不完全で、予想外の出来事に引きずられます。それでも結果的に、ユーロを誕生させたことは、ヨーロッパ官僚 = 政治家の質の高さを証明したと思います。

このテーマに初めて取り組むときは、叙述の背景が理解しにくいので、他の概説書を読んでから本書に挑むのがよいでしょう。

われわれは、あなた方ドイツ人に言いたい。  
もしヨーロッパを貿易黒字を増やす手段としてみているのであれば、  
それはそれで仕方がないことだ。

しかし、  
ヨーロッパ建設に参加する必要性を理解していないなら、  
いつの日かヨーロッパが空中分解し、  
あなた方は黒字を失い、  
多くの失業者を抱える事態になるだろう。

チャールズ・グラント 『EUを創った男』

マルクはドイツ社会の管理と安定性に貢献した。  
しかし、この50年間は離乳期だったのだ。  
1999年になって、  
ドイツは要約マルク廃止の準備を整えたのである。  
象徴的に言えば、  
ドイツはナショナリズムの唯一合法的なシンボルともいえるマルクを廃止することや、  
超国家的な欧州機関がマルクを管理することを承諾したのである。

パドア = スキオツパが書いた物のなかに、  
ときどき『君主論』への言及があるというのは興味深い。  
「・・・貿易および金融関係が、  
少なくとも最低限の国際的な金融当局を必要とするほど相互依存的になってくると、  
君主不在の状態を是正する必要が生じてくる。」

彼女（サッチャー首相）は1984年のブリュッセル・サミットで  
「私のお金を返して！」と叫んで机を叩くという、  
まるで飲み屋にいるような振る舞いにおよび、  
同僚である他国の首脳をギョッとさせた。  
しかし、イギリス国内では英雄だったのだ。

中央銀行が成功するには、よりソフトな、ある要因が不可欠だ。  
それは、・・・市場や世論と対話する術である。

マット・マーシャル 『ザ・バンク』

# 太平洋戦争の起源

徳島 昇治

本書は「太平洋戦争への道」を戦争に至る経過を主として国際関係史の流れの中で捉えたものである。戦争へ至るまでには様々な要因があっただろうが、とりわけ、日本が国際社会に対し、どのような態度でのぞみ、どのような点で失敗、また誤りを犯したのかが本書では描かれている。

1920年代、日本は戦後国際社会の有力メンバーであった。海軍軍縮条約の下で日本は英米とともに「ワシントン体制」のもと、世界的な軍事均衡と、アジア・太平洋地域の安定を担う国家として認められていた。しかしながら、満州事変や満州の分離、それに続く1933年の国際連盟脱退などによって、1930年から1941年に至るまでの日本外交は、世界の中で次第に孤立していく。こうした中でも、日本の国際協調派は軍部の独走による「二重外交」に悩まされながら、ワシントン体制にとどまる方法を模索してきたが、軍部の巧みな世論操作やテロ活動によって次第にその支持基盤を奪われ、戦局を拡大してしまった。

もう一点は、「英米依存からの解放」といったスローガンの下に、世界秩序の再編成を試みるのだが、それも「世界情勢の変化」についての甘い判断によって行われる場合が多かった。そして機会主義的、独善的で自主性のない政策を続けたために、国際世界の中でますます孤立してしまった。

このような国際秩序に反する行いや国際関係においての見通しの甘さ、長期的な展望の欠如が戦争に至る要因になったと本書は述べている。

現在のアメリカは、国際社会での孤立、イラク戦争などの戦争に対する見通しの甘さ、民主主義を広めるというスローガンでの独善的な世界秩序の編成など、太平洋戦争に至る前の日本と似た状況にいるのではないかと思う。そしてこのような状況はいずれ、過去の日本がそうであったように、諸外国との決定的な対立に発展する可能性がある。

戦後、アメリカを中心とした国際秩序が作られ、日本はアメリカに追従する形で国際社会に参加してきた。しかし、このような国際主義の流れに反するようなアメリカに追従するのは世界をふたたび分裂させてしまう動きに手を貸すことになりかねない。

過去に戦争があったように、現代もまた問題への対応を誤ると、ふたたび戦争を繰り返さないとも限らない。当時の日本は国際社会で孤立を深め、戦争に突入した結果、敗戦した。イラク戦争を始めた米国も国際社会やイラクの民衆の同意が得られず、結局は失敗した。アメリカがこのような失敗から、やがてまた国際主義に戻る時がくるかもしれない。したがって日本も安易に現在のアメリカに追従するのではなく、長期的な展望をもって国際社会に参加すべきである。また過去のように、国益主義、国家主義などを掲げずにグローバルな流れに同調し、あくまでも国際主義の風潮を強化するよう、ほかの国と協力していくべきであるに思う。

## コメント

日本にとっては、戦後秩序の出発点となったのが太平洋戦争でした。中国大陸に攻め入り、植民地国家を築き、東南アジアでも資源や市場を確保しようとしたが、欧米の国際秩序にそれを受け入れさせる可能性があったにもかかわらず、それに失敗したわけです。植民地を多く持つ英仏に比べ

て、旧秩序の革新を求めるアメリカとドイツの、前者ではなく後者に同盟者を見たことが、深刻な結果をもたらしたと思います。

戦争に至るまでには多くの選択肢と並列した可能性があったことを前提に、それらを将来の国際秩序として長期的に判断することの難しさ、国内政治事情による制約、などを私は考えました。

欧米諸国は、なぜ、  
1931年には日本軍による満州侵略を黙視したにもかかわらず、  
10年後には日本と戦争を賭してまでも、  
中国を支援するようになったのだろうか。

ワシントン体制は明確な機構というよりも、  
むしろ、理念・概念の意味合いが強く、  
列国の自発的な相互協力によりアジアの安定を維持し、  
中国の近代国家にふさわしい穏健的変革を支持することを表明するものだった。

もともと体制（システム）とは、  
一定の現状維持状態を内包するものであり、  
急激な変革を防ぎ、  
安定を維持する機構に他ならない。

さらに、この秩序には経済的な面があったことを想起する必要がある。

ワシントン体制は事実上、  
金本位制と同義となり、また、  
それを支柱としていたわけである。  
その意味では、  
ワシントン会議体制は資本主義的国際主義と特徴付け得る。

ワシントン諸条約の枠組内において、  
列国は相互関係の安定に一応の成功を収め、  
軍事面よりも経済面で国際関係を規定し、  
そして、  
中国を国際秩序に取り込むことによってそのナショナリズムを緩和していった。  
このような中国における成功こそが、  
日本に一部勢力、すなわち、  
陸海軍将校、右翼主義者、国家主義知識人等を絶望に追い込んだのである。

入江昭『太平洋戦争の起源』

# 国際通貨制度入門：歴史・現状・展望

尾崎 裕輔

この本は、前半で 1815 年から 1965 年までの国際通貨制度の発展の歴史について述べ、後半で今後の国際通貨制度の展望について述べている。ロバート・トリフィン、ベルギー生まれのイェール大学の経済学者であり、国際金融政策に関する業績で有名な人物である。

まず、この本の初版年度は 1968 年であり、当時の国際通貨制度は固定為替相場制である。第二次世界大戦後、米ドル金為替本位制を中心とした IMF 体制（いわゆるブレトン・ウッズ体制）が創設された。他国経済が疲弊する中、アメリカは世界一の金保有量を誇っていたので、各国はアメリカの通貨米ドルとの固定為替相場制を介し、間接的に金と結びつく形での金本位制となったのである。

それまでの過程として、多くの専門家や中央銀行の当局者は 19 世紀に確立されたが第一次世界大戦によって破綻した金本位制を再現しようと精力を傾けていたが、1960 年代初期のドル危機によって、将来の通貨秩序は過去の再現によっては成り立たないと確信するようになる。筆者の見解としては、金本位制は 19 世紀の世界の広い地域において為替相場の安定の維持に成功はしたが、もはや神話化された理想論であると捉えている。

さて、このような考察がなされた後、国際通貨制度の長期的進化について論じられている。この本であげられた主要な論点は 3 つある。第一に国際通貨準備の適切な使用（不必要な政策調整にかわるものとして、必要な政策調整を補完するものとして）、第二にこの目的のために必要とされる国際通貨準備の量と増加率、第三に世界準備プールの構成（第一の目的の挫折を防ぐため、1 つの準備手段から他の準備手段への急激な転換をもたらす不安定化的衝撃を避けるため、国際準備の構成に関して必要な協定を含む。）である。

これらの論点をもとに筆者は、今までに展開された諸提案の長所と短所とを評価たうえで、各国の互いに矛盾し合う立場を調停するために、全ての関係当局に一致した利害関係に必要な合意を示している。第一に、なんらかの形における信用準備が創出あるいは破壊されるべきという合意、第二に信用準備の性質と構成に関して、あるいは信用準備に付せられる利子収入を安定した国際準備による自由な使用に関しての合意、第三に黒字国による信用準備の蓄積と必然的に関連してくる貸付能力の利用についての合意である。以上の 3 つの結論は、特定国の国内通貨が後になって自由に金に換えられることを排除し、またそれが国際通貨として自由かつ無秩序に使用されることを排除している。

結果としてその後の 1971 年のニクソンショック以降は金と米ドルの兌換が停止され、各国の通貨も 1973 年までに変動為替相場制に移行したため、金本位制は完全に終焉を迎えた。今日においてトリフィンの予言は合致したと判断できるであろう。1968 年の時点においてこのような自信をもって将来の国際通貨制度を語りえたのは、まさに広大な歴史的視野をもって国際通貨制度の進化を眺めたトリフィンのすぐれた洞察の延長なのではないだろうか。

## コメント

これも難解な本でしょう。国際通貨の問題は、それを理解するために長い助走が必要です。しかし、何か分かりかけてきたとき、この昔の名著を読めば、きっと今でも驚嘆するはずで。

1960 年代後半、第二次世界大戦後に構築された国際通貨体制は動揺し、その改革が激しく議論さ



れました。本書の著者、ロバート・トリフィン、その論争の中心にあったヨーロッパ側の指導者です。彼の名を冠した「トリフィンのジレンマ」というのは、一国の通貨でしかないドルが、国際通貨として利用されることの問題点を明確に指摘し、ドルよりも独自の国際通貨を世界が採用する根拠となりました。今日、IMFにおいてSDRsやヨーロッパにおいてはユーロが誕生したのは、彼の理論が与えた衝撃の結果とも言えます。

ここ数年においてIMFの介入が急速な勢いで展開してきたことは、おそらく国際通貨制度の根本的改革への道を開くのに役立つものと思われる。

その結果として、

IMFが将来において必要とされる準備の増かを供給し、通貨の安定と、世界の貿易と生産における可能な限りの成長率とを両立させながら、国内政策と国際的政策を促進し、かつ、支持するように、準備増加の全体量と加盟国への現実の配分との両者を方向付けることができるようになる。

われわれの国際通貨制度をこのように進化させることによって、各国の通貨上の主権は一部分併合されることになるが、

しかしそれは、

すでに今日行われている併合の程度に比べて、必ずしもより大きなものを必要としないし、

また、

はるかによく評価され、理解されうるものである。

基軸国は、

その国の通貨が国債準備の保有手段としてまだ人気のある初期の状況では、他の場合に比して、

はるかに大きく、より長期にわたる赤字を賄ってゆくことが可能である。

しかしながら、

基軸国がもしこのような他人まかせの動きに従いつづけると、

やがて必然的に、

他国がドル保蔵からその保蔵取崩しへと転換する時期が訪れる。

ロバート・トリフィン 『国際通貨制度入門』

# バナナと日本人：フィリピン農園と食卓のあいだ

福永 英理子

近年、日本の東南アジア諸国との関係は大きなひとつのテーマとして論議されている。

一般的に、メディアで取り上げられるこのテーマは、日本での生活者としての私たちには響きにくい。そんな、日本(先進国)と東南アジア諸国(第3世界)とのテーマを、「バナナ」という身近な存在を通して私たちに問いかけたのが、この、「バナナと日本人」という本である。

フィリピンのバナナ農園の人々は、もともとは自分たちの食べられるものを自分たちで栽培する農民だった。しかし彼らは今や、自分では食べたくもないバナナを作っている。自分たちで食べるものの生産から、食べないものの生産へとなぜ転換したのか。ここには、第3世界との貿易に対する先進国の利権が大きく影響している。利益をもくろむ外国企業によって、法律専門用語の並ぶ外国語のよく分からない契約書を突き出され、大きく方向転換してしまったのだ。

ミンダナオ島のバナナ農園は住友商事を含む4つの多国籍企業に独占されている。残りの3つの多国籍企業の持ち主はアメリカである。つまり、利益の流れ先は、フィリピンの市場経済ではなく、アメリカ経済である。企業がフィリピン政府や大地主と結びついて農園を拡大していく様子は、戦前の植民地主義的なものを感じざるをえない。多国籍企業が半奴隷制農業で利益をむさぼっているのだ。

ミンダナオのバナナ農園は、日本市場の急成長に刺激されてできた、日本人の食を満たすための農園だった。しかし皮肉なことに、フィリピンでのバナナ栽培が始まった時、日本人はバナナに飽きはじめていた。この影響を受けて、農家は膨大な借金を抱え込むことになる。豊かになって、あまりバナナを食べなくなってしまった日本の消費者と、生産の方向転換が出来ずに貧困に悩まされるフィリピン農家が浮かんでくる。

日本人の食生活は為替に大きく影響されている。私たちが買うバナナの値段は、日々動いている。バナナは、消費者である私たちの側では、市場の実勢によって動く商品だ。しかし、市場原理による選択がまるでうごかないように、バナナを生産現場は仕組まれている。バナナを生産する契約農家やその労働者は、資本主義の仕組みから経済的に閉じ込められてしまっているのだ。

バナナ農園を、もとの別の食品を作る農園にすればいい、という意見も出てきそうだが、長期契約を結ばされていることもあり、もとの食品の作り方すらもはや忘れてしまい、農民達は、バナナに縛り付けられて、バナナ以外の作物を作る文化を奪われているのだ。また、農園では、商品であるバナナを病気から守るために、農薬の空中散布をする。この空中散布という方法では、働き手である労働者にも自然と掛かってしまう。その影響として出る病気と、川や山や大地の汚染は、深刻な問題である。

豊かになって、バナナを食べなくなった日本人と、バナナを増産して貧しくなったフィリピン人。増産させたのは誰か？ バナナを生産して暮らす人がいる。「安い」「栄養価が高い」というだけの計算では、消費者の身勝手が目に余るといえよう。

生産する側と、消費する側、貧しさと、豊かさ。筆者は「私たちは豊かで彼らは貧しく、だから豊かな私たちが彼らに思いを及ぼすべきだというのではない。」と述べている。

「互いに相手への理解を視野に入れて、自分の立場を構築しなければ、彼らの孤立と、私たちの自己満足の距離は、この断絶を利用している経済の仕組みを温存させるだけに終わるだろう」とも述べている。先進国として、第3世界の経済にどう関わっていくか考えさせられる本

である。

## コメント

私たちが豊かに暮らしていることを不思議に思わないのに、なぜか世界には貧しい人々が多く、余りにも多くいます。それだけでも矛盾を感じるのに、本書に限らず、多くの研究は、これら二つの現象が結びついている、と主張します。つまり、私たちが豊かであるのと同じ理由、同じメカニズムが、彼らは著しい貧困に苦しめている、と。

世界的な貧困や所得格差の問題を、このように全体として理解する視点は<従属論>が示しました。いわば、国際的な搾取、です。これに対して、貧困の理由はもっと各国の国内要因や歴史的な偶然、技術的要因、などにある、という反論もなされましたが、今では、誰も本書の視点を無視できません。貧困という問題を、きわめて多面的に、具体的に、私たちの生活と結び付けて考察したところに、本書の問題提起の深さがあります。

多国籍企業によるバナナ農園の開発は、  
生産の次元では、二つの問題がある。

第一は、

法律上の制限をかいぐり、  
どうしたら肥沃な土地をまとめて獲得できるか、・・・

第二は、

実際の働き手をどのように働かせるか、・・・

選択こそ自由への途であり、  
農民にとっては企業の支配から逃れるすべだった。  
その可能性を教えるはならないし、離脱を許してはならなかった。

世界市場で儲かる作物が持ちこまれたとき、  
それを喜んだ受益者の支配層もあったが、  
(歴史の)主体の中心になる労働者、農民は、それに反対した。

農民は、

1898年のネグロス島のように、  
現金収入をもたらすサトウキビ栽培よりも、  
“採って食べる”水田稲作を望んだのである。

バナナのようなありふれた食物についての探求さえも、  
それを深めてゆけば、  
日本とフィリピン両国の市民が平等に手をつなぐきっかけが、  
そこから生まれてくると私は考えている。

鶴見良行『バナナと日本人』

# 分裂の世界史

：かくてエゴむき出しの時代が始まった

北澤 麻衣

『分裂の世界史』は20世紀、特に第二次世界大戦後の世界について考えさせられます。ケネディ、フルシチョフの「キューバ危機」、毛沢東、フルシチョフの世界を驚かした中ソ対立、ベルリンの壁はどのような背景があって築かれたのか(東西ドイツの緊張緩和の道のり)、アスワン・ハイダムの特権など、題名の『分裂の世界史』どおり、第二次世界大戦後の20世紀の人物(人物描写を含めて)と事件をグローバルなひろがりをもって表現されます。

第二次世界後は、世界大戦というような悲劇は繰り返されなかったものの、サブタイトルにもなっている『～かくしてエゴ剥き出しの時代が始まった～』を感じられる記述も多く、世界のさまざまな歴史的指導者たちが和解と抗争を繰り返しつつ自分の国のために政治的手腕を発揮してきたのがうかがえます。

どの出来事の記述も興味深かったのですが、すべてについては述べられないので、ここでは、中でも興味深かった「キューバ・ミサイル危機」について述べます。なぜなら、この「キューバ危機」をとめることができなかつたならば、人類史上最悪の結果(核兵器による人類滅亡)も考えられたからです。ここで活躍したのはケネディと、フルシチョフですが、お互いの譲歩のバランスがよくて危機を回避することができたということがよく分かります。フルシチョフが農民的なたとえ話を用いて、「この危機はまん中に結び目のあるロープのようなものだ。両サイドが引っばれば引っばるだけ、結び目は固くしまり、ついには剣を用いなければ切り離せなくなるであろう。しかし、どちらの側も引くのをゆるめれば結び目は解けるであろう。」(フルシチョフが、今後力づくでカストロを排除するような企てをいっさい行わないとの公約をケネディの側からなされるなら、引き下がる事に同意するという事と表している。)といったことによくあらわれていると思いました。

この本を読み進めていくにつれて、世界におけるヨーロッパの支配的地位が20世紀において完全に取り壊されて、何世紀にも渡ってヨーロッパは世界の中心に座していたが、2つの大戦がすぎてみて、『分裂の世界史』にかかっている冷戦の時期になるともはや権威を維持していきただけの力がなかつたことがうかがえる。(数世紀にわたって植民地支配の下に置かれたアジア・アフリカの諸国民がヨーロッパの脆弱さを完全に自覚するようになってどの大陸でも非植民地化のペースが強まったのが理解できます。また、ヨーロッパも平等を主張する諸民族とともに、文明生活の重荷と特権と分かち持たなければならぬことが理解できると思います。) 21世紀もこれからどのようなかわかりませんが、経済や情報のグローバル化が進む中、一方では、国家・社会の分裂と抗争は絶えない。でも、私たちは20世紀の軌跡を検証することによって、これからの世界を考えることができるのではないかと思わせる本であると思いました。

## コメント

「この本を読み終えるまでに、数千人の人が殺されている。」と、私はコメントしたことを覚えていません。もっと多いかもしれません。指導者と呼ばれる人たちが、戦争や弾圧、その権力を維持するために、どれほど多くの兵士や市民を死に至らしめるか、知っておくことは重要です。

もちろん、困難を克服する指導者の姿勢、歴史を切り拓いた指導者たちの言葉もすばらしいと思います。しかし、冷戦とナショナリズムという枠の中で、大きな戦争は回避されたとしても、20 世紀後半が決して平和でなかったことを実感します。

こうした指導者たちは、その後、急速に減少します。それは、社会変化の源泉が、戦争や独立、革命から、グローバリゼーションに移ったからです。

突如 1961 年 8 月 13 日の夜、  
東からの接近地点がすべて閉鎖され、  
高さ 2 メートル半の壁の建設が始まった。  
約 40 キロメートルにもわたって、  
くねくねとあるいはぎざぎざに折れ曲がって  
ベルリン市内を貫き、  
道や街や庭や公園や家屋や、  
墓地までも切り裂いて伸びる壁であった。

この地帯への侵入を企てる者が出た場合の命令は「射ち殺せ」であった。

イギリスにとってのスエズ運河は、  
中東ならびにアジアへの生命線であり、  
ペルシャ湾から石油の流れを支障なく確保し、  
同時に船舶の安全を確保するために不可欠のものであった。  
イーデンは、  
イギリスの喉笛にナセルの指をかけさせるわけにはいかない、  
と強く主張した。  
・・・フルシチョフはイーデンに、  
侵略をただちにやめないようならイギリスに核攻撃が行われるであろう、  
と通牒した。  
大西洋の彼方から電話してきたダレスは、  
遠征軍が呼び戻されぬ限り、  
銀行の取り付け騒ぎは序の口にすぎない困った事態になるだろう、  
とイーデンに伝えた。

1968 年 4 月 4 日、  
キング牧師がメンフィスで白人狙撃者の手によって暗殺されてしまう。  
・・・絶望と集団ヒステリーが生み出した焼き打ち、略奪、狙撃、・・・  
ワシントンまでが、  
火を放たれたあちこちの街区から上がる煙が  
ポトマック河の上をうねり流れる有り様となり、  
被爆都市の様相を呈した。

A . L . サッチャー 『分裂の世界史』

# 追われゆく抗夫たち

林 健太

1960年代、経済の高度成長がまもなく始まるこの時期、日本にはまだ多くの炭鉱があった。ほぼ1世紀にわたり全国の総出炭量の半分に及ぶ石炭を産出し繁栄をほこった福岡県の筑豊炭田。なかでも無数に存在していたとされる「小ヤマ」と呼ばれた中小炭鉱における労働者ひとりひとりと彼らをとりにまわっていた当時の社会や労働環境について悲惨な実態の記録である。

朝鮮戦争で最後の好況期を終えた炭鉱は急速な衰退を始めた。さらに1960年代には「エネルギー転換」のかけ声のもとに多くの炭鉱はつぶされ、多くの失業者が九州全域にあふれていた。彼ら炭鉱失業者たちはその日の生命、生活をつなぐために「肩入金」と呼ばれる前借金制度で僅かな身売り金を受け取って、見も知らぬヤマへ売られてゆくことになる。

当時の中小炭鉱では労働者は経営者に対し圧倒的に弱者であったために、炭鉱経営者は途方もないノルマを抗夫たちに課した。経営者たちはわずかな肩入金を差出すと、その後の賃金は決して正確に配給することはなかった。代わりに、到底生活していけない賃金の約10%程度と言われた配給米を支給するだけで、労働者たちに苦渋の生活を強いた。

そこでの生活がどれほど苦しいものであったとしても、抗夫たちには退職の自由は無い。なぜなら、僅かな肩入金は半永久的に返済不可能であり、ヤマがつぶれるまで労働者（抗夫）を奴隷としてくりつけておくためのものであるからだ。したがって抗夫たちは飢餓や貧困にあえぎ、以前にもまして生活は苦しくなる。再びヤマがつぶれると、また生活のためにわずかな肩入金を求めて他のヤマへと売られていく。この悪循環だ。

**「株式会社という帽子をかぶった暴力団であり、監獄であり、従業員として登録された奴隷である」P4**

圧制の限りをつくし労働者を搾取しつくす中小炭鉱の経営者と抗夫を、上野はこのように表現する。そして中小炭鉱の本質的な問題点は飢えさせる賃金や飢餓状況での生活ではなく「奴隷制」という労働の質にあると上野は言う。

長期にわたる賃金の遅配や欠配、炭鉱経営者の非人道的な圧制、また閉山と抗夫たちが追いつめられてゆく過程において、過酷な非人間的生活を強いられて、どのように苦しんだか、また、労働組合の結成や最低限の生活の保障など、非力な抵抗を示したために解雇されていく様子を上野は多くの「小ヤマ」を取材して抗夫たちと接し、共に生活し、彼らの証言を克明に記録している。

この本に記録されていることが当時の中小炭鉱の労働者の実態全てに当てはまるとはいえないかも知れないが、上野が多くの炭鉱に自ら降りて地底から提起したこの作品には明治、大正、昭和にかけて近代日本の経済的繁栄を地底から支え続け、その役割を終えて炭鉱とともに消えていったおびただしい数にのぼる貧困や圧制に苦しむ労働者、彼らの家族を取り巻く生活が詳細に記録されている。

上野が彼らと同じ視線で見なければ永久に知られることの無かった炭鉱労働者の実態は、現代の人々に様々に訴えてくるものがあるだろう。

## コメント

多くの写真が載っています。それでも、これが数十年前まで日本の現実であったことに、驚くことでしょう。最近でも、夕張市の深刻な困窮状態がニュースとなっています。

これほど過酷な労働条件や生活を、なぜ人々は耐えるのか？ むしろ、なぜさっさと辞めて、他の町や仕事へ移らないのか？ しかし、現実には新しい雇用機会は非常に限られており、家族や仲間を捨てて外で生きる選択は難しかったはずです。今も中国では、同じ苦しみを味わう多くの坑夫たちがいます。サッチャー政権と闘ったのも炭鉱労働者たちでした。アメリカでも昨年、大きな炭鉱事故のニュースを聞きました。

こうした現実と、時代の雰囲気を知ってほしい、と思います。

### 筑豊

それはまことに近代日本の「地下王国」であった。  
そしてこの獰猛な息吹に満ち溢れた地下王国を支えてきたものは、  
日本の資本主義化と軍国主義化のいけにえとなった民衆の、  
飢餓と絶望であった。

.....

巨大な怪獣の口にも似た無数の坑口は、  
飽くことを知らぬ貪婪な食欲をもって彼らの肉体をのみこみ、  
血にまみれた石炭といっしょに彼らの打ち砕かれた骨を吐きすて続けた。

大小無数の陥落湖沼をかかえて果てしもなく広がる黒い砂漠、  
その風化したボタ山のひだの間に  
さながらシラミかダニのごとく蠢いている幾万の棄民群。  
もしあなたがそれについての一片の知識も持たない初めての旅行者であるならば、  
まるで日本中のルンペンや乞食を一地域に集結させたかと思われるほど  
累々たるこの「生ける屍」の大群が、  
すべて昨日まで働き続けてきたあの炭鉱労働者の今日の姿であることを承認するのは、  
おそらく決して容易なことではないだろう。  
あるいはまたあなたが  
いささかの予備知識とそれに基づくどれほど悲惨な想像図を描いて訪れた者であろうと、  
眼前の現実があなたの知識と想像の貧弱さを証明してくれるのに  
多くの時間を要しないであろう。

追われゆく坑夫たち。  
もはや彼らのまえに明日がないことを彼らは知っている。

上野英信『追われゆく坑夫たち』

# 国際紛争：理論と歴史

大塚 俊輔

国際紛争は、21世紀になってもなお、重要なテーマである。20世紀の二つの世界大戦と米ソの冷戦が終わり、国際紛争は21世紀初頭の9・11ニューヨーク同時テロで新たな局面をむかえた。米国は対テロ戦争を続けておこなっている。また、中東における紛争、極東アジアの北朝鮮問題など国際紛争の火種は絶えない。ジョセフ・ナイはアメリカの著名な国際政治学者であると同時に、民主党政権の実務者として活躍してきた。彼は現在、ハーバード大学ケネディ行政大学院の特別教授である。ナイはカーター政権で国務次官代理(1977年～1979年)、クリントン政権では国防次官補(1994年～1995年)を務めた。本書は国際紛争を理解するための、筆者のハーバード大学における国際政治の教科書である。

はじめに、リアリズム(現実主義)とリベラリズム(国際協調主義)、更にコンストラクティヴィズム(構成主義。考え方や文化、社会的側面に重点を置いた国際関係への分析的な取り組み)とを比較し、世界政治における紛争の論理について考察している。ナイ自身はリアリストであるが、実際、アメリカ外交の中核にいる際には、一つにとらわれず多くの考え方を借用していたという。彼は国際政治が人間行動に関する可変的で不確かな学問であるとしている。例えば、ペロポネソス戦争の時代に核兵器やインターネットの出現を予見することは不可能であった。ナイは本書の中で、国際政治に関して断定的な述べ方をしていない。代わりに私たちに、歴史を理解した上で事例を通じて理論を結びつけ、何が変化したのか、変化しなかったのかを考え続けるように求めている。

続いて、19世紀以降の国際システムについて、特にヨーロッパのバランス・オブ・パワー(勢力均衡)の視点から考察している。第一次大戦後、リベラリストから主権国家間のシステムを維持する手段としてバランス・オブ・パワーが使われたと非難された。代わって国際連盟のような集団安全保障のシステムの構築が進んだ。しかし集団安全保障もまた曖昧であった。その適用にはすべての加盟国の同意が必要であり、19世紀のヨーロッパのバランス・オブ・パワーからの干渉を嫌うアメリカは国際連盟への批准を拒否した。すでに世界のキー・プレイヤーとなっていたアメリカは戦後秩序への責任を放棄したのだった。集団安全保障の挫折に時間はかからなかった。アメリカ、ソ連といった超大国抜きで国際連盟は指導力を発揮することはできず、ヴェルサイユ体制下のドイツへの多額の賠償金と領土制限が、ドイツに再軍備とヒトラーの登場を生むこととなる。

第2次大戦はヒトラーの戦争であったのか。ナイは確かに、ヒトラーは個人として戦争の主要な役割を果たしたが、それ以上のものでもあったと分析している。ヴェルサイユ体制、共産主義の拡充、アメリカの孤立主義など、第1次大戦の未処理というシステム上に経済の破綻とヒトラーの侵略戦略が乗ったものであったと考えられる。さらに太平洋戦争はこういったヨーロッパの混乱には無関係であった。日本は米英が太平洋で依然として海軍力を保持していることに危機感を感じ続けていた。また恐慌が資源に乏しい日本が勢力を維持するために、大東亜共栄圏の確立が米英に対抗する有効な手段になりうることを決意させ、国民もそれを支持したのだった。中国や東南アジアへの南進はアメリカとの紛争を呼んだ。日本の指導者の大多数も米英に対し開戦した場合、極めて見通しが厳しいことを自覚していた。しかし、現状維持は不可能であり、米英との融和は日本が経済的に締め上げられ、アメリカにひれ伏すことになる。したがって、不可避的に開戦やむなしと判断させたのである。

冷戦の構造はバランス・オブ・パワーを一変させた。第一にグローバリゼーションである。



グローバリゼーションは、エネルギー、経済、情報、安全保障と相互依存関係を確立させた。また、超大国による軍拡競争が核兵器の拡散を生んだ。しかし同時に、「恐怖の均衡」という特殊なバランス・オブ・パワーの形態を生み出し、冷戦が「熱戦」となることを防ぐ要因となりえたことが、今日の核の抑止論の根拠となった。更に、冷戦構造の崩壊がすでにグローバル化していた世界に東西の縛りを解き放ち、脱国家的主体の役割を大きくした。公には経済的統合や枠組みの役割が増し、私的にはNGOが国境を越えた活躍の場を増している。もう一つ、紛争の次元が国家単位から、民族、宗教、あるいは特定の主義者へと移行した。テロリズム自体、何も最近のものではないが、核兵器などの大量破壊兵器がパワーの概念を一変させたため近代社会の複雑なシステムがテロリズムに対して脆弱性を生んでいる。

ナイはこのような時代において、ハード・パワーに代わり、情報や文化といった目に見えないソフト・パワーが主要な役割を果たすようになったと解いている。インターネットがそれを助長している。インターネットは組織としての集団、地理的条件、政治的権力を無用としつつある。また、今後政治は流動性を増し、主権国家の枠組みを維持することがより困難になっていくだろうと予言している。

## コメント

これはクリントン政権で国防次官補であった著者の書いた、よくできたテキストです。歴史上の国際紛争を挙げながら、それを説明する理論や概念を的確に説明して、興味深いです。

戦争や軍事史のテキストは、しばしば、現実には重要であった例外や複雑さには欠けるわけです。国際的な軍事衝突に至った複雑な要因を理解するには、当然、社会や経済の変化を詳しく議論しなければなりません。本書は、その要点を整理し、巧みに提示している点で優れています。

戦争が不可避であるという確信が、  
戦争を引き起こす主要な要因だった。

多極的だったヨーロッパのバランス・オブ・パワーが  
徐々に二つの強固な同盟システムに収斂していき、  
柔軟性を喪失したのである。

われわれは、プロセスまたは関係のパターンに影響を与えた、  
19世紀システムにおけるヨーロッパ文化や理念の変化も、  
考慮に入れなければならない。

銀行家や貴族たちはしばしば国境を越えて交流し、  
労働者も同様であったが、  
そうした交流はヨーロッパ諸国が戦争に向かうのを阻止することができなかった。

もし制度とコミュニケーションのチャンネルが平和継続への安定した期待をもたらすなら、  
囚人のジレンマは回避されよう。

ジョセフ・J・ナイ『国際紛争』

# プレイヤー・ピアノ

青才 章吾

この作品は作品の作られた1952年当時から見て数十年後、おそらくちょうど今現在かその少し先の時点における機械の全自動化世界を描き、それを批判したものである。この世界では人間の仕事のおよそほとんどがあまりに発達した機械に任せられ、一部の管理職や機械の発達、メンテナンスを行う技術者以外の人間は、やることもなく生きがいをなくしている。主人公のポール・プロデュース博士はそんな機械化社会を作り上げた指導者の息子でありながら、機械に職を奪われた人々に共感を覚える。いわゆるディユートピア小説である。

ヴォガネットが描いたこの「機械化社会」に登場する真空管や、磁気テープをふんだんに使ったメカニズムは、このパラレルワールドに限りなく近づいた現在われわれが読むと若干古臭くも感じられ、手塚治虫や藤子・F・不二雄の表現するステレオタイプのSF世界を彷彿とさせる。

しかし全合衆国民の個人情報が一見して判断できるIDカードや全自動洗濯機、食洗機、題名にもなっているプレイヤー・ピアノ、すなわち演奏者の指を跳ね除け自らが奏者として鍵盤をたたき続けるピアノなどのアイディアはこの現実社会においてすでに求められ、実現されてきたものであり、ヴォガネットの先を見る目は決して夢想家の歪んだレンズを通したのではなく、彼の描く世界は人々の当然といえる利便性への欲求を代弁した世界といえる。つまるところ真に合理性、快適さを求めると行き着く先は技術的な差の多少はアレ簿がネットの描く社会なのである。人々の物質的欲求が全て満たされた理想郷 プレイヤー・ピアノの世界。

だがそこに暮らす人々は理想郷の中にあってもさらに悩みを抱き続ける。作中世界には緩やかな階級制度があり、彼がその渉外をいかに過ごすかは大部分持ち前のIQによっけい決定付けられる。IQが標準かそれを下回る多くの民衆は専門的な職業に付くこともできない。彼らに出来る仕事はすべて機械が彼らより巧みにこなしてくれるからだ。そのためにあぶれた大勢はインフラ整備か軍隊に入ることによって生計を照るのである。彼らに将来に対する展望や工場意欲、達成感はいずれも皆無であり、ただただ「エリート」に不満を募らせることで日々を浪費してゆくのである。しかしすべては人々の欲求からもたらされた必然であり、強固に構築されたヒエラルキーは簡単には崩すことは出来ない。

主人公の友人エド・フィナティー博士はこの構造化された理想郷に疑問を抱き、義憤を募らせる大衆とともに革命を企て、主人公ポールをリーダーとして革命組織にいざなう。ポールは彼らに共感を覚えつつも、どの階級にも属さない妻と二人の平穏な余生を望むが、エドの強い態度にとうとう革命の指導者として時代の流れに逆らうこととなる。

この革命自体は結局あってない失敗で終わりを見ることとなる。エドが崇拜する革命家、ラッシャーはポールに言う。

「勝ち負けは問題じゃないんだよ、博士。われわれが努力したという、そのことが重要なんだ。それを記録に残すために、われわれは努力したんだ！」

彼らの行動は歴史の中でどう評価されるのか。その行いは我々に何を伝えるのか。わずかに富む国がある反面多くの植える国がある現在、ラストに向けるポールたちの思いはわれわれの指標となるのではないか。

## コメント

ヴォネガットの小説について、「炭鉱のカナリア」説を思い出します。すなわち、炭鉱に発生する無臭の有毒ガスは、かつて多くの命を奪いました。今のような優れた検知器がなかった時代、炭鉱内にカナリアを入れた籠をつるして、有毒ガスの発生を警戒した、というのです。つまり、カナリアのさえずる声が消えたら、危険が迫っている、と。

SF小説でも、ヴォネガットのような作家たちは、現代社会の異常さや問題を私たちより早く感じているわけです。

この小説では、機械、が人間を追いやっています。今なら、コンピューターや中国、と言うでしょう。映画・マトリックスや、中国との貿易摩擦、工場移転は、私たちの生活に広がる不安と恐怖の源泉です。イラクでは戦争の下請けや機械化も進んでいます。

・・・ほとんど人力をかりない生産方式・・・  
ノウハウが戦争を勝ち取ったのだ。  
デモクラシーの恩人は、  
ノウハウであった。

客観的に見れば世の中はたしかにどんどん良くなっている、  
とポールは強いて自分に言い聞かせた。  
・・・ノウハウと汎世界法とが、  
地球を最後の審判の日の待合所として、  
できるだけ快適で便利な場所に変えようという、  
その宿願を達成する機会を手に入れたのだ。

「ねえ、博士、  
なんとなく気味が悪くないかい？  
あのキイの動き具合を見てると？  
まるで幽霊があそこにすわって、  
一心に弾いているのが見えるみたいでさ」

カート・ヴォネガット・Jr 『プレイヤー・ピアノ』

華氏四五一度  
本のページに火がつき、燃え上がる温度・・・

死んだ書物は、  
ハトのような翅をひらめかして、  
ポーチの上へ、庭の芝生へ、  
落下してくる。

レイ・ブラッドベリ 『華氏 451 度』

# 《I P E》と社会認識 = 社会変化

小野塚 佳光

以上のような書評のテーマは、どう見てもI P Eではないし、共通したテーマが無い？ と思うかもしれませんが、しかしこれらには、《社会認識 = 社会変化》という共通した問題意識があります。

## 本年度の目標

I P Eに関心を持ってくれたゼミの学生たちと、自由に話し合うこと、が私のゼミの理想です。しかし、「I P Eの果樹園」を材料にしようとする、話し合う基本となる知識や理論が足りないから分からない、という声を聞きました。結局、I P Eとは何を勉強すればよいのか、それが分からない、と。

私の考えは、その答えを自分で見つけるしかない、ということです。ゼミでテキストを決めて輪読することに、私は限界を感じます。誰もが、自分の関心に従って本を読みます。関心を持ってないテキストであれば、つまらないし、自分の考えている問題にとって役に立たない、と思うでしょう。

自分で適当なテキストを見つけるには、良い本を、できるだけ多く読んでみることです。それしかありません。同じ問題について多くの本の説明を比較し、どれが自分にとって最も納得できるか、決めてください。

他方では、確かに、古典的研究があります。さまざまな論文や研究シリーズの基となり、何度も言及されている本は、古典的なテキストです。しかし逆に、あまり知られていない研究を自分で「発見」することが、独自の関心や研究を深めることになります。

I P Eは比較的新しい学問であり、日本ではまだ評価が確立されていない分野です。日本語で読める専門研究も少なく、適当な紹介は無いでしょう。そこで、私から見た重要文献一覧を配布しました。その中から、自分で関心のある本を選んで報告し、読んでいない人にも、何が書いてあるかわかるように話してほしい、と課題を出しました。さらに、コメントする二人をあらかじめ指定したわけです。

## 社会認識と社会変化

I P Eは《社会変化》を解明する学問です。その意味では、歴史学や社会学と同じです。

政治や経済の仕組み、変化への力や制約を扱う点で、政治学や経済学とI P Eはよく似ているでしょう。そして、風土や環境、意識や文化を扱う点で、地理学や文学、心理学とも関係あります。I P Eは、さまざまな問題について、個別の解決ではなく、社会として協力する解決策を、それゆえ、国家の枠組みによって秩序の形成を考える姿勢を持ちます。ですから、政策や意思決定、制度や組織、集団、規範、危機、暴動、抑圧、・・・などを扱い、国際関係論や政策・制度論、イデオロギーの研究、などと同じように見えます。

それでよい、と私は思います。I P Eとは、国際・政治・経済 = 社会・歴史・地理 = 環境・心理・・・世界文学、なのです。未来の宇宙コロニーから非合法に帰還したアンドロイドと、《彼ら》を抹殺するハンターとの共感や恋愛を描くSF小説がここに含まれるのも、戦争、恐慌、通貨同盟、貧困、などが多く取り上げられるのも、それらが過酷な社会変化を経験し、社

会認識を転換する事例、その叙述 = 理解のテキストとして、学ぶにふさわしいからです。

私たちは、それを認識できるかできないかに関わらず、社会変化の一部であり続けるでしょう。時間においても、空間においても、際限の無い社会変化の一部でありながら、しかもなお、《自由》や《友愛》や《公平性》や《連帯・共同体》といった理想を人は求めます。あなたたちも、ベルリンやニューヨーク、上海の摩天楼を見下ろす尖塔の上に立って、殺されると知りながら異星から故郷を求めて舞い戻ったアンドロイドたちのように、夜空に咆哮するときが来ないとも限りません。

経験と認識は連動し、認識と行動には関係があるでしょう。新しい社会を認識する者は、新しい社会を求めて行動します。正しい《社会認識》を求めて学ぶことです。考えることは、核兵器や自爆テロが示すように、強烈で、危険です。愚かな指導者に歓声を上げたのは、何も銃口で脅されたからではありません。

《アイデア》や《理想》なしに遂行される戦争は無いし、再建される国際秩序もありません。それが最後に天国ではなく地獄を生み出すとしても、《市場のモデル》や《市民革命》、《資本主義》、《福祉国家》、《ミサイル防衛システム》、《情報革命》、《合理的経営》、などが「信者」を奪い合います。ポーランドの《自由労組 = 連帯》でも、ベルリンの壁崩壊、中国の《改革開放》、あるいは、独裁者の処刑や亡命でも、新しい《社会認識》を得るということは、それが人々に、自分たちの生活や行為の正しい意味を示していると実感させるとき、世界を震撼させるほど激しいパワーを発揮します。

## I P E の名著と研究

私がゼミ生たちに紹介した I P E の重要文献リストを掲げておきます。これらは私の本棚から抜き出したものですから、必ずしも均整の取れた、完全な I P E 研究紹介ではありません。しかし、今後の研究で参考にはなるでしょう。

I P E を学ぶために、この文献リストから読んだ本について、自分だけの読書ノートを作ってください。気に入った文章を引用し、コメントを付けることです。そして、自分が経験していることや、メディアが伝える情報と比較してください。

私が提供する「I P E の果樹園」も、アイデアの蒐集に利用してください。世界では、これほどいろいろなことが起き、さまざまな改革や理想、あるいは苦悩、が語られているのか、という感動を共有してほしいです。

ただし、この書評集で手薄なのは、市場の動きを理解するテキストです。どのような理想や意図も、それが描くように世界を変えることはありません。私たちは、もっと歴史を学び、もっと異なる社会の変化を比較する必要があるでしょう。そして、近代以降、それを加速し、拡大してきた《市場》について、もっと深く理解しなければならないな、と悟るわけです。

問題の焦点は、  
国家と市場というそれぞれきわめて異なる方法で人間活動を規制し、  
組織化していく二つの手段の相互作用にある。

ロバート・ギルピン 『世界システムの政治経済学』

2004年の2月中旬から数週間の出来事だった。

はじめはゆっくりと、  
徐々に加速するように、  
世界中の道路からマンホールのふたが消えたのだ。

中国の需要によって、  
くず鉄の価格が最高レベルに跳ねあがると、  
世界中の盗人が同じことを思いついた。

夜のとばりがありると、  
鉄のふたを持ち去り、  
切り刻んで中国へ出荷する地元の業者に売りはらったのだ。

この変化が最初に感知されたのは、  
中国の南東岸から指呼の距離にある台湾だった。

次はモンゴルやキルギスタンといった隣国だ。

だが、  
この蘇えりつつある「中華帝国」の引力は、  
やがてはるか遠くにまで及んでいった。

日の沈むところどこでも、  
こそ泥は中国の飢えを満たすべく働いた。

シカゴでひと月に150個以上のふたが消えた。

スコットランドの「排水路の大泥棒」事件では、  
ほんの数日で100個を超えるふたがなくなった。

モントリオールで、  
グロスターで、  
クアラルンプールで、  
罪もない歩行者たちがマンホールにころげ落ちた。

ジェームズ・キング 『中国が世界をメチャクチャにする』

## I P E全般

- \* # ロバート・ギルピン『世界システムの政治経済学』東洋経済新報社, \* 『多国籍企業没落論』ダイヤモンド社
- \* # ローバート・コヘイン『覇権後の国際政治経済学』晃洋書房
- \* スーザン・ストレンジ『カジノ資本主義』岩波書店, \* # 『国家の退場』岩波書店
- ジョン・E・スペロ『国際経済関係論』東洋経済新報社
- \* ~ 渡部経彦『国際経済の政治学』岩波新書
- \* ウォルター・ラフィーバー『アメリカの時代』芦書房
- 桜井公人・小野塚佳光『グローバル化の政治経済学』晃洋書房

## 外交・安全保障

- \* E・H・カー『危機の二十年』岩波文庫, 『ナショナリズムとは何か』みすず書房
- \* J・A・ベーカー 『シヤトル外交 激動の四年』上下, 新潮文庫
- \* ~ A・L・サッチャー『戦争の世界史』, 『殺戮の世界史』, 『**分裂の世界史**』祥伝社黄金文庫
- 船橋洋一『日本の対外構想』, 『日米経済摩擦』, 『冷戦後』岩波新書, 『サミットクラシー』朝日文庫, 『通貨烈々』朝日新聞社
- \* # C・ベイツ『国際秩序と正義』岩波書店
- \* ~ ボブ・ウッドワード『ブッシュの戦争』日本経済新聞社
- デイビッド・ハルバースタム『ベスト&ブライテスト』
- N・チョムスキー『覇権が生存か』集英社新書, 『中東 虚構の和平』講談社
- \* # **メアリー・カルドア**『**新戦争論**』岩波書店
- \* **入江昭**『**太平洋戦争の起源**』東京大学出版会, 『日本の外交』, 『新・日本の外交』中公新書
- ケント・E・カルダー『アジア 危機の構図』日本経済新聞社
- \* **チャールズ・グラント**『**EUを創った男**』NHK出版
- \* **ジョセフ・ナイ**『**国際紛争:理論と歴史**』有斐閣, \* 『アメリカへの警告』日本経済新聞社, (共編)『なぜ政府は信頼されないのか』英治出版

## 経済(貿易・資本主義)

- ジュリアス・デアンヌ『グローバル企業と世界経済』ミネルヴァ書房
- レイモンド・ヴァーノン『ハングリー・ジャイアント』
- \* # ハーシュ&ゴールドソープ編著『インフレーションの政治経済学』日本経済新聞社
- \* W・アーサー・ルイス『国際経済秩序の進展』東洋経済新報社
- \* J・パグワティ『保護主義』サイマル出版会, \* 『自由貿易への道』ダイヤモンド社, \* # 『グローバリゼーションを擁護する』日本経済新聞社
- \* # 吉富勝『日本経済の真実』東洋経済新報社, # 『アジア経済の真実』東洋経済新報社
- \* 江口隆・松田学『貿易摩擦・見えない戦争』
- \* # ロバート・D・パットナム/ニコラス・ペイン『サミット 先進国首脳会議』TBSブリタニカ
- \* ジョセフ・E・スティグリッツ『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』徳間書店
- \* クリストファー・ウッド『バブル・エコノミー』共同通信社
- \* ~ ピーター・タスカ『揺れ動く大国・ニッポン』講談社文庫
- \* ビル・エモット『日はまた沈む』草思社
- \* エズラ・ボーゲル『中国の実験』日本経済新聞社
- ロバート・B・ライシュ『ザ・ネットワーク・オブ・ネイションズ』
- \* デイビッド・カレオ『アメリカ経済は何故こうなったのか』日本経済新聞社
- # ポール・クルーグマン『世界大不況への警告』早川書房
- \* リチャード・ローズクランス『新・貿易国家論』中央公論社
- ヤン・ティンバーゲン『国際秩序の再編成』ダイヤモンド社

\* ダニエル・ヤーギン&ジョゼフ・スタニスロー『市場対国家』(上下)日経ビジネス人文庫

## 国際通貨・金融制度

- \* # キンドルバーガー『パワー・アンド・マネー』産業能率大学出版会, \* # 『インターナショナル・マネー』ダイヤモンド社
- \* # F・ハーシュ, M・ドイル, E・L・モース『国際通貨体制の再編』日本ブリタニカ
- ジョン・ウィリアムソン『為替レートと国際協調』東洋経済新報社, \* # 『国際通貨制度の選択』岩波書店
- \* ジェフリー・フリーデン『国際金融の政治学』同文館
- \* # リチャード・N・クーパー『国際金融システム』HBJ出版
- \* # ポール・ド・グローブ『通貨統合の経済学』文眞堂
- \* # ロナルド・マッキノン『ゲームのルール』ダイヤモンド社
- \* # デスラー&ヘニング『ダラー・ポリティクス: ドルをめぐるワシントンの政治構造』TBSブリタニカ
- \* # ボルカー&行天豊雄『富の興亡: 円とドルの歴史』東洋経済新報社
- チャールズ・A・クームズ『国際通貨外交の内幕』日本経済新聞社
- B・アイケングリーン『21世紀の国際通貨制度』岩波書店, \* # 『国際金融アーキテクチャー』東洋経済新報社
- \* # ロバート・ソロモン『マネーは世界を駆け巡る』東洋経済新報社, # 『ソロモン 国際通貨制度研究 1945-1987』千倉書房
- \* 黒田東彦『通貨の興亡: 円, ドル, ユーロ, 人民元の行方』中央公論新社
- # R.N. ガードナー『国際通貨体制成立史』上下, 東洋経済新報社
- \* マイケル・モフィット『ワールズ・マネー』
- \* R. トリフィン『国際通貨制度入門』ダイヤモンド社
- \* ~ 石山嘉英『国際通貨の知識』日経新書

## 政治・体制

- \* J・A・ホブソン『帝国主義』(上下)岩波文庫
- \* # B. センメル『社会帝国主義史』みすず書房
- \* # A. ポーター『帝国主義論』岩波書店
- \* 立花隆『田中角栄研究 全記録』上下, 集英社文庫
- \* ~ ロナルド・ドーア『貿易摩擦の社会学』岩波新書, \* ~ (深田祐介&)『日本型資本主義なくしてなんの日本か?』カッパブックス, 『学歴社会 新しい文明病』岩波書店, \* ~ 『不思議な国 ニッポン』筑摩書房, \* ~ 『日本を問う 日本に問う』岩波書店
- \* 森嶋通夫『政治家の条件』岩波新書, 『イギリスと日本(正・続)』岩波新書, \* 『サッチャー以後のイギリス』岩波新書
- \* ~ C. B. マクファーソン『自由民主主義は生き残れるか』岩波新書, \* 『現代世界の民主主義』岩波新書
- J. リンス『民主体制の崩壊』岩波書店
- \* ロバート・ダール『デモクラシーとは何か』岩波書店, 『統治するのは誰か』行人社
- \* # デヴィッド・ヘルド『デモクラシーと世界秩序』NTT出版
- \* イヴァン・ルアード『グローバル・ポリティクス』人間の科学社
- ジョン・W・ダワー『人種偏見』TBSブリタニカ
- \* J. レックス『人種問題の政治学』三嶺書房

## 社会変動

- \* アンソニー・サンプソン『新版 兵器市場』TBSブリタニカ, \* 『セブン・システーズ』日本経済新聞社, \* 『ヨーロッパの解剖』サイマル出版会, \* 『企業国家IT』サイマル出版会, \* 『銀行と世界危機』TBSブリタニカ
- ~ T・K生『韓国からの通信』, 『続 韓国からの通信』岩波新書
- \* ライト・ミルズ『社会学的想像力』紀伊国屋書店
- P. F. ドラッカー『ネクスト・ソサエティ』ダイヤモンド社
- ジョン・グレイ『グローバリズムという幻想』日本経済新聞社



スーザン・ジョージ『なぜ世界の半分が飢えるのか』朝日選書, \* & マーチン・ウルフ『グローバリゼーション 賛成 / 反対』作品社

ロイド・ティンバレイク『アフリカはなぜ飢えるのか』亜紀書房

\* ~ 鶴見良行『バナナと日本人』岩波新書

\* ~ 上野英信『追われゆく坑夫たち』岩波新書

\* ~ 鎌田慧『ドキュメント 追われゆく労働者』ちくま文庫, 『自動車絶望工場』講談社文庫

\* ピーター・ストーカー『世界の労働力移動』築地書館

\* # S. カースルズ & M. J. ミラー『国際移民の時代』名古屋大学出版会

\* ~ 張平『凶犯』新風舎

\* ゴードン・チャン『やがて中国の崩壊が始まる』草思社

李昌平『中国農村崩壊』

\* # D. ハーヴェイ『都市と社会的不平等』TBSブリタニカ

\* ルイス・マンフォード『技術と文明』岩波新書, \* 『都市の文化』鹿島出版会

## 思想・歴史

\* # クリシャン・クマー『ユートピアニズム』昭和堂

\* **トマス・モア**『ユートピア』岩波文庫 ほか

\* ~ ジョージ・オーウェル『1984年』早川文庫

\* ~ **カート・ヴォネガット, Jr.**『プレーヤー・ピアノ』早川文庫

\* ~ **フィリップ・K・ディック**『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』早川文庫

デイヴィッド・マクレラン『イデオロギー』昭和堂

\* # **ダグラス・ノース**『文明史の経済学』春秋社

イマニエル・ウォーラーstein『史的システムとしての資本主義』岩波書店

\* # **アンドリュー・シオンフィールド**『現代資本主義』オックスフォード大学出版

A. **ギャンブル**『イギリス衰退 100 年史』みすず書房

シドニー・ポラード『ヨーロッパの選択』有斐閣選書

\* # **ハロルド・ジェームズ**『グローバリゼーションの終焉』日本経済新聞社

\* ~ **トーマス・フリードマン**『レクサスとオリーブの木』(上下)日経文庫

カール・ポランニー『大転換』東洋経済新報社

\* # C. P. **キンドルバーガー**『大不況下の世界: 1929-1939』東京大学出版会, \* # 『熱狂・恐慌・崩壊: 金融恐慌の歴史』東洋経済新報社

\* # H. W. **アーン**『世界大不況の教訓』東洋経済新報社

~ **林敏彦**『大恐慌のアメリカ』岩波新書

\* ~ **D. A. シャノン**『大恐慌』中公新書

\* **エリック・ホブズボーム**『産業と帝国』, 『20 世紀の歴史: 極端の時代』

\* ~ **早坂忠**『ケインズ』中公新書

\* # **ロバート・スキデルスキー**『ケインズ時代の終焉』日本経済新聞社

G. **ミュルダール**『福祉国家を超えて』

\* # R. **ベンディックス**『国民国家と市民的権利』岩波書店

\* # **ベンディックス・アンダーソン**『想像の共同体』リブロ

# 現代日本社会の不安

小野塚ゼミ

小玉・北沢・増田・福永・尾崎・林・大塚  
加川・宇野・徳島・小川・青才・清水・越智

日本社会のここがおかしい！

社会認識のさまざまな方法から学んで、自分たちの生きている社会をあなたたちはどう思うか？ この社会のどこかに、深刻な問題は無いだろうか？ ゼミ生たちに考えてもらいました。彼らが示した7つの問題点は以下のようなものです。

- 1 教育
- 2 新自由主義
- 3 パラサイト・シングル
- 4 医療
- 5 品格
- 6 格差
- 7 ホームレス

確かに、最近の教育問題は非常に深刻です。いじめ問題や子供たちの自殺、政治家たちは「愛国心」、文科省の「ゆとり教育」は急変し、学校の先生にも企業や工場と同じように、職務規定や就労時間、査定、解雇が必要だ、・・・とバラバラな方向で議論は加速しています。

肝心の子供たちは、もはや学校に関心を失ったのでしょうか？ 子供同士の遊び場はなくなり、お金をもらってソフトを買えば、ゲーム機やインターネットに夢中です。それに比べて、取り残されたような教師たちは、生徒の心の問題にまで触れたくないようです。

新自由主義が悪いのか？ 政治でも経済でも、グローバリゼーションや市場競争、自由化を唱えることが流行しました。メガバンクは救済してもワーキングプアは無視され、パートや非正規労働者ばかりが増えています。企業や銀行は外国資本に買われ、公共部門や地方は切り捨てられます。最近、少し見直しもされていますが、新自由主義に変わる社会的な理想は見当たりません。

社会はバラバラの個人に崩壊し、その挙句、若者にとってパラサイト・シングルが最も合理的な「欲望機械」としての暮らし方なのです。格差が拡大することを積極的に称賛していた政府も、最近では選挙対策で、再チャレンジや弱者救済を唱えています。でも、具体的に何かしているとは思えません。

住宅や雇用、医療、年金、などの社会的な資本の配分を、私たちは合意によって承認し、長期的に維持してきたはずですが、社会が許容する生活水準は高まっているのに、なぜ個人として、それを満たせない生活を強いられるのか？

驚いたことに、学生たちの感想は、彼らが好きでやっているだけではないか？ ホームレスの暮らしも気楽らしい・・・

ゼミ生たちの話し合い

「日本の社会はこのままもっと悪くなる？ 将来、どうなるだろうか？」

「どこかに良い社会はあるのか？ 外国はどうか？」

「時代が変われば、こうした問題をどのように扱っていたのか？」

翌週、私たちは、結婚について、仕事について、政府や政治について、話し合いました。新聞から、男性も女性も30代で結婚していない割合が、この数年で10ポイントも上昇した、という話をしました。男性の半分、女性の3分の1が、なぜ40歳になるまで結婚しようとならないのか？

参加した学生たちは、結婚するつもり、のようです。しかし、それほど早くはない？確かに、女性たちが結婚しなくても生きていけるのは、それだけ働く機会が増え、社会の偏見も減ったからでしょう。しかしまた、男性の稼ぎが少なく、不安定であるのに、女性たちの望む男性像では高い所得やステータスが重視されそうです。

仕事についても、彼らには明確な目標がありません。かつて、自分の稼ぎで、好きな人と家庭を持つことは、最も一般的な理想であり、大人としての規範でした。子供を育てるのがどうということかも、身近に見て知っていたと思います。学生たちには実感が持てないようです。

このまま日本の問題が悪化すれば、それは社会がどうなってしまうのか？社会・経済が崩壊したロシア・東欧圏では、自殺率が急増し、結婚する人は急減しました。もちろん、赤ちゃんもいなくなっただしょう。私の問いかけは空回りでした。

問題を社会として解決するには、何が必要か、もっと考えてほしいと思いました。確かに、問題は余りにも大きく、複雑です。その場の思いつきではなく、持続する意志が必要でしょう。そして、異なる発想をぶつけ合って、もっと話し合うべきだったと思います。

## 最後のコメント

書評や議論を通じて、社会を考える意志、そのダイナミックなエネルギーを自分のものにしてほしいと思います。

北沢さん、増田さん、加川さん、大塚君は、討論後のメールを送ってくれました。共通するのは、政治に関する言及です。「国家の品格」は流行語になりましたが、私はエリートたちの腐敗、能力低下、責任放棄や逃避、という問題があると思いました。

かつてのような政府の圧倒的権威は消えてしまいました。それは、自由化や技術変化で、政府・官僚・法律などが強制力を失ったからです。それとともに、頭が良ければ、自分で莫大な利益を得る、という姿勢が容認され、むしろ賞賛されるようになりました。法律や制度の抜け穴が広がって、次々にダムを破壊しつつあるようです。

政治家は何をしているのでしょうか？旧利益や新利益に振り回され、あるいは、輸入されたイデオロギーや都合の良いキャッチフレーズ、怪しげな戦前思想などはあっても、説得的な改革を進める姿勢が見られません。

中国人民が経験しているグローバリゼーションは、  
世界のどこよりも、  
激しい社会的軋轢を生じています。

私は、日本などの裕福な諸国が中国を責めるより、  
公害や都市化、資源不足、産業構造の高度化、  
労使紛争、金融危機、などを克服してきた自分たちの制度や政策を示して、  
中国とアイデアや制度を共有するのが良い、と思います。

本来  
人間を教育する使命をもっていたはずの日本の教育制度が、  
単なる能力検証・人間選別の装置に成り下がりにつつある

.....

単に試験に合格するために、  
資格さえ得てしまえば忘れてもいいようなことを  
出世のルールの要求に応じて学習することは、  
知識のまったく違った意味での手段化であって、  
教育の冒涇である。

その社会の文化が質的危機に面してくる。

単なる学歴稼ぎ以外の何ものでもない.....

その内容たるや  
形式的で、  
冗長で、  
不安と退屈に満ち、  
探究心と想像力を窒息させる、  
要するに反教育的なのだ。

想像力，創造性，探究心，  
物事を根本から考えてみようとする決意，  
良い仕事をしたという満足感だけのために良い仕事をする意欲などは  
どこに求めたらよいのか？

R . P . ドーア 『学歴社会 新しい文明病』